

一人一人が教材（楽曲）とつながる音楽活動の在り方を探る

内垣 美佳

本研究では、旋律をつなぎ合わせながらクラスで一つの音楽（お囃子）をつくる活動を通して、子どもたち一人一人が教材（楽曲）の魅力や味いを見出し、思いや意図をもって音楽活動をする子どもの姿をめざした。音楽づくりの実践を中心に研究を進め、教材とつながり、一人一人が「させられている」のではなく、「したい」と思える音楽活動の在り方を丁寧に探っていく。

キーワード：音楽づくり、リレー演奏、旋律づくり、お囃子、「おくやまばやし」

1. 研究の目的

音楽を担当して2年目となる3年生の子どもたちとは、これまでに音楽づくりや鑑賞を中心にしながら小グループにおける協同的な学びの実践を行ってきた。その結果、仲間と共に課題に向き合い、楽しんで表現したり鑑賞したりする姿が見られる。しかし、子どもたちの中には「リコーダーが苦手だ」「音符を見てリズムが打てない」など特に技能面に対して苦手意識を持ち、学習意欲を高められないままの子がいる。スモールステップを積み重ねて技能を身に付けることは必要であるが、もっと子ども一人一人が教材（楽曲）と深くかかわることが大切ではないかと考える。

本研究の目的は、教材がもっている魅力や味いを感じさせることによって、「面白そうだな」「もっとやってみたいな」と一人一人が夢中になってその教材と触れ合い、思いや意図をもって表現できるようにすることである。

2. 研究の方法

2. 1. リレー演奏を常時活動として取り入れる

一斉に演奏するばかりでなく、もっとそれぞれが自分の奏でる音・音楽に向き合える場をつくるため、リコーダーや打楽器、手拍子などによるリレー演奏を常時活動として取り入れる。また、リズムリレーでは、いろいろなパターン（まねっこリレー・サンドリレーなど）で即興的にリズム打ちを行う。音楽づくりに必要な拍の流れにのって演奏することができるリズム感や、音楽と音楽をつなげて演奏する力を自然に身に付けられるようにする。リレー演奏をする際に大切にするのは次の3点である。①円になって全員の顔が互いに見えるようにする。②拍をしっかりと感じられるように教師がクラベスなどで拍打ちをする。③上手いだけでなく途中で指導やアドバイス等はしない。

《リレー演奏の形態》

リレー Aさん→Bさん→Cさん→Dさん

まねっこリレー Aさん→みんなで（Aさんのリズム）
→Bさん→みんなで（Bさんのリズム）→

サンドリレー Aさん→みんなで（もともになるリズム）
→Bさん→みんなで（もともになるリズム）→

2. 2. 鑑賞と音楽づくりを関連付ける

本題材で扱うお囃子は、お祭りに参加したことがある子にとっては、親しみのあるものであると考えられる。しかし、あまり馴染みがない子にとっては、興味・関心がもてないことも少なくないであろう。そこで、音楽づくりに取り組む前に鑑賞を行い、郷土に伝わるお囃子を数曲聴き比べたり、お祭りで演奏されている映像を見たりする。それぞれのお囃子のもつ雰囲気や特徴を感じ取り、鑑賞での学びを生かしながら音楽づくりに取り組める題材構成を行う。

2. 3. 旋律をつなぎ合わせて、一つの音楽をつくる

ラ・ド・レの3音を使って、2小節のお囃子の旋律を個人でつくる。旋律をつくるリズムはあらかじめ決めておき、実際にリコーダーで演奏しながらつくる。そして、一人一人がつくった2小節の旋律を3人グループや6人グループでつなぎ合わせる。さらに、太鼓や鉦のリズム伴奏を加えながら各グループの旋律をつなぎ合わせてクラスで一つの音楽（お囃子）にする。一つの音楽にするために、鑑賞を通して学んだお囃子の速度の変化やリズムの反復などを生かしたり、旋律の「続く感じ」と「終わる感じ」に着目させたりする。

2. 4. 旋律づくりのワークシートの工夫

記譜したり読譜したりすることに苦手意識をもっている子も楽しんで旋律づくりができるように、ワークシートの工夫をする。個人で2小節の旋律をつくる際

には、ラ・ド・レの3音のいろいろな組み合わせをできるだけたくさんつくれるように、音符は書かせずに階名だけを書くワークシート(図1)にする。次に、2小節分の五線譜カードに、自分がつくった旋律の中からお気に入りの旋律を音符と階名の両方で書かせる。この時に音符も書かせるのは、音の高低がよく分かるようにするためである。その五線譜カードを並び替えながらグループで旋律をつないでいく。(図2)

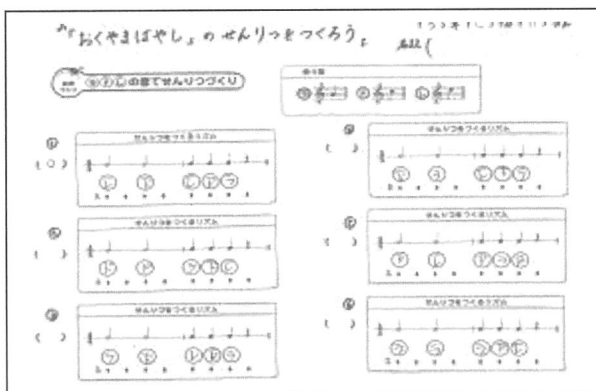


図1 つくった旋律の階名を書き込むワークシート

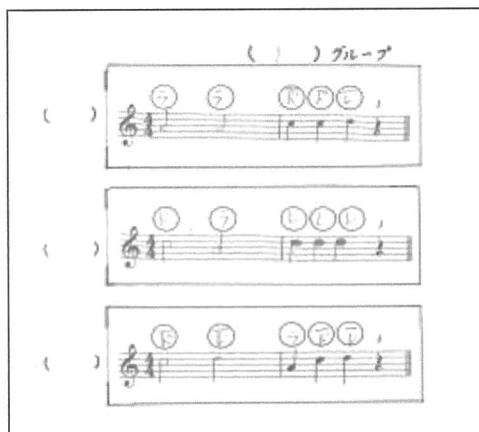


図2 グループで旋律をつなぐワークシート

2. 5. 表現する場を設定する

音楽をつくる楽しさを味わった子どもたちは、つくった音楽を表現し、他の人達に聴いてもらうことによって学びを振り返り、達成感を味わうことができると考える。そこで、本題材において、つくったお囃子を多くの人達に聴いてもらえる場を設定することにした。本校では、11月に「おくやままつり」が開催される。その「おくやままつり」を表現の場とし、「自分たちはこんなお囃子をつくりたい」という思いをもってつくった音楽を発表することができる題材構成を行う。

3. 授業の実際

ここでは、平成27年10月(教育研究発表会)に行った題材「日本の音楽に親しもう～おくやまばやしをつくらう～」(3年生)の実践について報告する。

3. 1. 使用した教材について

鑑賞教材:「神田囃子」「花輪囃子」「小倉祇園太鼓」(音源:「小学生の音楽3」鑑賞CD/教育芸術社)(DVD:「小学生の音楽鑑賞 鑑賞資料 3年郷土の音楽/監修:教育芸術社」)(DVD:「日本の祭り」NMD-4000M:KEEP)

音楽づくり教材:「ラ・ド・レの音でせんりづくり」(小学生の音楽3:教育芸術社)

3. 2. 学習展開の実際

3. 2. 1. 曲想を感じ取りながら日本の楽器の音を味わって聴こう

「神田囃子」「花輪囃子」「小倉祇園太鼓」の3つのお囃子を聴き比べ、次の4点についてワークシートに記入した。(①どんな音がきこえる?②使われている楽器③リズム・速度④その他に感じたこと・気付いたこと)

使われている楽器として、「たいこ」「ふえ」は子どもたちから挙がったが、「かね」は知らなかったのが、実際に楽器を見せて紹介した。「花輪囃子」では、「かけ声が入っている」「三味線が使われている」という意見も出された。また、聴くだけでなく、お囃子を演奏している映像を見ることによって、それぞれのお祭りやお囃子の雰囲気がより感じられたようであった。「はじめゆっくりでだんだん速くなる」「はじめは太鼓の音だけきこえてくるけれど、だんだん楽器が増えていく」「神田囃子よりも速い」などの意見も出され、速度や強弱などについて聴き比べられている子どももいた。

3. 2. 2. 「たいこ」と「かね」を鳴らしてみよう

お囃子を鑑賞し、「たいこ」や「かね」に興味をもったところで実際に楽器を鳴らすことにした。打つリズムを決めて、口唱歌を歌ってから楽器を持たせたが、特に「かね」はなかなか思うように音を鳴らすことができない様子であった。しかし、諦めずに何度も楽器を手にしようとする意欲的な子どもたちの姿が見られた。

3. 2. 3. 3つの音でお囃子の旋律をつくらう

まず、「おくやまばやし」をどのようなお囃子にしたかというイメージをもたせ、自分の思いや考えを自由にワークシートに記入させた。(図3) 鑑賞して学んだことを生かしながら考えられている子どもも多くいた。

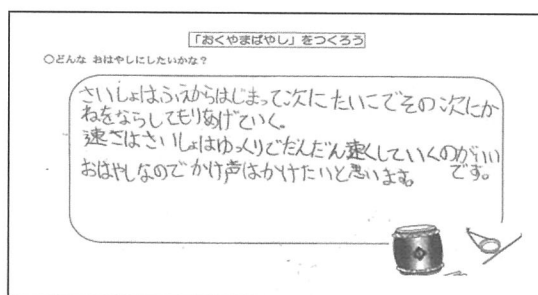


図3 どんなおはやしにしたいかな？

次に、ラ・ド・レの3音を使った旋律を個人でつくらせた。(図1) 全員が2小節分の旋律をつくり、その旋律をクラスの仲間とつなげて一つの旋律にしていくという見通しをもたせてからつくらせた。最後に、何種類かつくった旋律の中から一つお気に入りの旋律を選ばせて、その旋律を五線譜カードに書かせた。書き方に困っている子に優しく寄り添う子どもの姿も見られた。「これで合っているか心配だったから友だちに見てもらった」「友だちに教えてもらった」とうれしそうな子どもたちの声がきこえた。

つくった旋律の発表は、五線譜カードをプロジェクターで映しながら全員が楽譜を見られるようにして行った。つくった本人だけでなく、映し出された楽譜を見ながら全員でリコーダーを使って演奏した。

3. 2. 4. グループで旋律をつなげよう①

3人グループになり、それぞれが書いた五線譜カードを持ち寄って、旋律をつなげる活動を展開した。つなげる際には、「まとまりのある旋律にする」ことを課題とした。

3人グループでつなげた旋律を発表する際に、「旋律をつなげる時に気を付けたこと・工夫したこと」も発表させた。出された考えは、①レからドにいくようにした。(そうすると指使いが簡単になって演奏しやすいく)②それぞれの旋律が違う音から始まるようにした。③はじめの音とおわりの音がしりとりみたいにした。④最後の音をレにするときれいだったから最後の音をレになるようにした。等々であった。これらの考えをクラスで共有するために、全員でリコーダーを吹きながら確かめた。

常時活動として行っていたリズムリレー演奏が活かされているのか、ほとんどの子どもたちが拍の流れによって仲間の旋律とつなげてリコーダーで演奏することができていた。

3. 2. 5. グループで旋律をつなげよう②

次に、さらに2つのグループ（6人）で旋律をつなげ、まとまりのある「おくやまばやし」をつくる活動を行った。ここでは、2つのグループで旋律をつなげ

ることによって、「続く感じ」の旋律と「終わる感じ」の旋律があることを感じ取ったり、仲間と共に思いや意図をもってまとまりのあるお囃子をつくる楽しさを味わわせたりすることを目的とした。

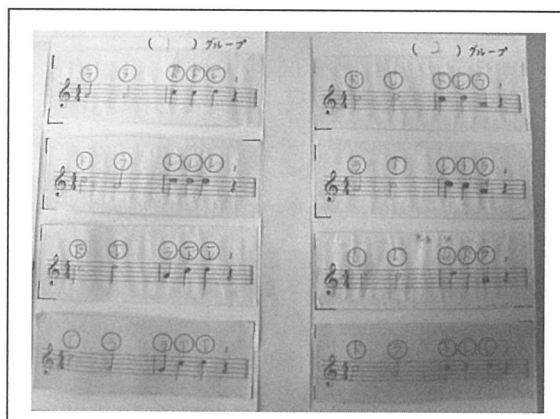


図4 2つのグループで旋律をつなげる

まず、旋律を聴き合い、どちらのグループの旋律を先にもってくると良いかを話し合わせた。その後、旋律の「続く感じ」や「終わる感じ」を意識して最後の2小節をグループでつくらせる活動を展開した。(図4)

た旋律ということもあり、拍子や速さを変えるなどして、曲想に変化を付けた。楽譜化したものを子どもたちに配布し、練習して「おくやままつり」で演奏発表した。「おみこしを作りたい」「はっぴを着たい」という意見も取り入れながら演出した。

ワークシート記入例（図5）

タイトル「おくやまばやしをえんそうして」

- ・たいこのたたくリズムが難しかったけど、楽しかった。
- ・ちょっと緊張しました。でも上手に吹けました。うれしかったです。
- ・練習よりすごく上手に出来ました。音楽はきれいだったと思います。
- ・自信をもって演奏出来た。1回も間違わなくて練習した甲斐があったと思う。
- ・来年も何かの発表をしたいです。

4. 授業の考察

①音楽づくりに取り組む前に鑑賞を行ったことによって、お囃子への興味関心が高まり、誰もが抵抗なく音楽づくりに取り組めた。また、鑑賞での気づきを音楽室に掲示したことで、子どもたち自らが学びを振り返り、音楽づくりに生かすことができた。

②鑑賞後、子どもたちの興味は太鼓や鉦に注がれるであろうと考えていたので、その学習意欲を持続させようと楽器に触らせる題材計画を立てた。全員に太鼓と鉦のどちらも体験させることで、「おくやまばやし」づくりへの意欲に結び付けられた。

③図3のように「おくやまばやし」のイメージを書かせたことによって、お囃子づくりを自分の事として捉えられていた。また、個人での旋律づくりでは、階名だけを書くワークシート（図1）を使用したので、誰もがいくつもの種類の旋律をつくることができた。

④個々でつくった旋律をつなげてまとまりのある旋律にすることを課題としたが、「まとまり」にあまりこだわる必要はなかったように感じた。西洋の音楽ではなく日本の音楽であることや、3つの音を使って同じリズムでつくった2小節の旋律であることを考えると、「まとまり」をもたせることに少し無理があった。五線譜カード（図2）を用いたことは、旋律の流れが音符から見て取れるため、旋律をつなげる活動の際に効果的であった。

⑤旋律の「続く感じ」と「終わる感じ」に気付かせようとしたが、考察④と同様に無理があった。1学期から取り組んできたリズムリレーのリレーパターンを取り入れて旋律をつなげるなど、旋律をつなげる方法は他にも考えられた。

⑥もっと最後まで子どもたちが主体となって「おくやまばやし」を完成させることができれば良かったが、図5にあるように、自分たちでつくった音楽を多くの人達に聴いてもらえたことは大きな喜びであったようである。「やりたい」「できるようになりたい」という思いから休憩時間にも一生懸命に楽器を練習する子どもの姿が見られ、技能的に難しい箇所も克服することができていた。

5. 成果と課題

音楽づくりは、子どもたちにとって学習の見通しがもちにくく、つくった音楽を演奏できてこそ充実感や達成感が味わえる。そのため、創意工夫の力だけでなく、表現の技能も必要となってくる。今回は、即興的なリズム遊びであるリレー演奏を常時活動として長期的に行ったことによって、音楽と音楽をつないだり、拍の流れにのって演奏したりする基礎的な力を自然に積み重ねられていたことが子どもたちの様子から明らかになった。また、鑑賞と音楽づくりを関連付けて題材計画を立てたことや、ワークシートの工夫などによって、子どもたち一人一人がお囃子の魅力に気づき、意欲的に課題に向き合うことができた。特に、音楽づくりの前に鑑賞を行ったことによって、お囃子の魅力や味わいを子ども自身が見出すことができ、お囃子づくりへのイメージを広げる結果となった。

個々につくった旋律をつなげてクラスで一つの音楽にする活動では、「自分たちでも音楽がつかれる」という充実感や達成感を味わわせられた。今回、「おくやままつり」で演奏発表する場を設定し、多くの人達の前で演奏したことも子どもたちに大きな自信をもたせ、次への意欲へと繋げられたと考える。

発表の場を設けることでたくさんの成果は得られるが、時間的な制約もあり、準備が大変であった。担任教諭をはじめ、多くの先生方の力を借りてできることであると改めて実感している。

子どもたちが思いを膨らませ、「したい」と思える音楽活動を展開するのは容易ではない。しかし、「音楽をつくるのが楽しかった」「みんなに表現を聴いてもらえてうれしかった」など、一人一人が教材（音楽）と向き合い、生き生きと音楽活動をする子どもたちの姿を目指して、これからもさらに研究を進めていきたい。

参考文献

- ・文部科学省 国立教育政策研究所（2011）「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校音楽】」 教育出版
- ・教芸音楽研究グループ（2013）「子どもの工夫が見える音楽づくりの事例集」教育芸術社
- ・村山二郎（2011）「日本の祭り 笛・太鼓名曲集」音楽之友社